

<アユの一生>

アユは、琵琶湖の漁業全体の漁獲量の3割超を占め最も漁獲量の多い漁獲物である。

鮮魚（食用）として流通のほか、養殖用や、河川放流用の種鮎として、流通している。

琵琶湖のアユは、そのほとんどが、一生を琵琶湖で過ごし、それらは成魚となっても、餌の藻類が琵琶湖には多くないという理由で大きくならないので、コアユと呼ばれている。（実際には、琵琶湖の鮎も4つのタイプがあり、生まれる時期によって大小が決まるようだ。）

6月、沖合いの湖面で群れを作り成長したアユは、川をさかのぼってくる。そして夏になると親アユが川底の岩や石に卵を生みつける。約2週間で孵化した稚鮎は川の流れに乗って琵琶湖へ移動する。この頃の稚鮎を氷魚と呼ぶ。琵琶湖では、若い鮎たちは、動物性のプランクトンを食べているようである。琵琶湖の鮎たちは、海へは下れないので琵琶湖の中だけで成長する。1年で一生を終える鮎のような魚を、年魚という。



（写真提供：滋賀県立琵琶湖博物館）